

第一節 はじめに

「湖南の扇」は一九二六年一月一日「中央公論」で発表され、翌年同名の単行本に収録された作品である。脱稿直後、斎藤茂吉宛の書簡に「仕舞の方が出来損つてゐる」という発言があるため、芥川はこの小説を成功作と見なしていなかった。とはいえ、単行本の題名にもなっていることから、実は、彼自身は気に入っていたと考えられる。

この小説の舞台となったのは、一九二〇年代の中国の湖南長沙である。日本人旅行者の「僕」は多くの革命家を生んだ長沙に来て、旧友の譚永年の案内で、妓館にあがる。そこで妓女の玉蘭は斬罪にされた土匪の頭目黄六一の血を染みこませたビスケットを手に取り、「わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味はひます」⁽¹⁾ 言いながら食べ始める。その衝撃的なシーンを目撃した「僕」は、後日長沙を去った船の中で桃色の扇を垂らした一本の扇を発見する。

この作品は、一九二一年三月から八月にかけての中国旅行に基づいて書かれた「中国土産」として、芥川の中国体験を検証する形でたいして読まれてきた。土匪の血が染みこんだビスケットという奇をてらった設定から、この作品を魯迅の小説「藥」⁽²⁾（『新青年』、一九一九年五月）との類似関係から論じる先行研究も少なくない。⁽³⁾

注目すべきなのは、芥川の視察したのが、一九二〇年代の激動の社会変革に直面した中国であるということである。にもかかわらず、「湖南の扇」をはじめ、彼の帰国後の作品の中で、中国で感じとった革命思想はあまり言及されず、当時の中国の社会状況は批判的に取りあげられている。そのため、中国旅行後に発表された作品群は「政治に対する根源的無関心」⁽⁴⁾を示しているという否定的な評価を下されている。

一九七〇年代以来、塚谷周次が「ラジカルな革命的雰囲気の原因を検証しようとするリアリズム精神を所持することで、この作品が失敗作であるか否にかかわらず、この種の作品の系譜上、この作品が相当特異な位置をしめる」⁽⁴⁾と評価しているように、革命運動のかかわりから、この小説を評価しようという試みもなされてきた。関口安義もこの

小説の「執筆モチーフは湖南の民、すなわち中国人民への関心である」とし、「それは激動と混乱の中国を見た彼の確信であり」、「病んだ末期の眼は、的確に隣国中国の未来を見抜いていた」と積極的に評価している。

このように対照的な先行研究を概観してから、「湖南の扇」を検討する際に、芥川の中国旅行体験と当時の中国の革命運動を照らし合わせ、より客観的な視野に入れて綿密に分析する必要があると考えられる。

一方、従来の研究では、語り手の日本人旅行家「僕」、湖南出身の医者譚永年と土匪の黄六一といった、いわゆる男性登場人物に注目して作品の分析が行われてきた。本論文では、「情熱に富んだ湖南の民の面目」を示したのが中国の近代知識人男性ではなく、下層社会に置かれた妓女であることに注目したい。

含芳については、「極めてミステリアスな存在」と論じられるだけで、これまで十分に検討されていない。また、女主人公の玉蘭については、恋人の人血ビスケットを食べるといふ彼女の「情熱的行為」が、これまで「恋愛の情熱」と解釈されてきたが、実は別の側面もあるのではないだろうか。これらの女性表象は同時代のコンテクストにおいてどのような意義を持っているのか。本論文は、「他者」として描かれた中国妓女に焦点をあて、先行研究を踏まえながら、芥川の中国体験に散在する事象とあわせてこの小説を新たに分析する。

第二節 革命家としての妓女

含芳が最初に登場する場面は、「僕」が到着した長沙の埠頭に設定されている。長沙の「見すほらしさ」、「薄汚い支那人」などが「僕には失望に近い感情を与へた」が、彼女の姿は「僕」の視線を惹いた。

しかし僕は棧橋の向うに、——枝のつまつた葉柳の下に一人の支那美人を発見した。彼女は水色の夏衣裳の胸にメダルか何かをぶら下げた、如何にも子供らしい女だつた。僕の目は或はそれだけでも彼女に惹かれたかも知れなかつた。が、彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰かに合ひ図でもするやうに半開きの扇をかざしてゐた。……

(中略)

「さあ、土匪の斬罪か何か見物でも出来りや格別だが、……」
 (中略)

「ぢやもう一週間前に来りや好いの。あすこに少し空き地が見えるね。――」

それは赤煉瓦の西洋家屋の前、――丁度あの枝のつまつた葉柳のある処に当つてゐた。が、さつきの支那美人はいつかもそこには見えなくなつてゐた。(一三八―一四〇頁、傍線は引用者、以下同)

日本人男性の「僕」は見る主体であり、扇と含芳は見られる対象である。「僕」の男性中心主義的な視線を通して、「子供らしい」含芳がエキゾチックで、弱々しい存在として描かれている。一方、「誰かに合ひ図でもするやうに半開きの扇をかざしてゐた」という動作を通して、彼女が自ら「見せる主体」になろうとしているという意図が見えてくる。しかし、彼女は何者なのか、何故そこで「扇をかざしてゐた」のだろうか。しかも彼女が立つた「赤煉瓦の西洋家屋の前」は、土匪の黄六一が斬罪に処せられた場所である。これは単なる偶然であろうか。そうでなければ、彼女は黄六一とその斬罪と何か関連を持っているのだろうか。この時点で彼女の素性は何も明らかされておらず、小説全体の構成からみると、彼女は謎の人物のように見える。含芳のエキゾチックな姿は日本というへ内部への視点を持つ「僕」の目を通して、(外部)の存在の様相として表象されると言えよう。

譚の案内で、「僕」は妓館で「支那美人」の含芳と再会する。妓館で「僕」は含芳を「病的な弱々しさ」をもつた女と見ていた。一方、彼女の横顔を「日かげの土に育つた、小さい球根」に譬えて見た「僕」の視線を通して、半封建・半植民地社会の重圧を受けつつも、逆境を生き抜いて生命力に溢れていた彼女の強靱な姿が浮上してくる。

「僕」は譚の紹介で、この「支那美人」の出身地を知る。

「この人の言葉は綺麗だね。Rの音などは仏蘭西人のやうだ。」

「うん、その人は北京生まれだから。」(一四八頁)

ここでわかることは、中国語が全く分からない「僕」の視覚と聴覚を通して、含芳という「支那美人」は中国水郷的

な美と西洋的な響きを持ち、二重にエキゾチックな色彩を帯びていることである。興味深いことだが、「北京生まれ」という含芳の設定はこの湖南長沙の妓館で何か特別な意味を持つているのだろうか。

含芳に関する謎はこれだけではない。「僕」は譚の説明から、その日に含芳が埠頭で誰かを出迎えたことを知る。

譚はこう言う通訳をした後、もう一度含芳へ話しかけた。が、彼女は頬笑んだきり、子供のようにいやいやをしていた。

「ふん、どうしても白状しない。誰の出迎いにいったと尋ねているんだが。……」

(中略)

「おい、何と言ったんだい？」

「その人は誰の出迎いでない、お母さんの出迎いにいったんだと言うんだ。何、今ここにいる先生がね、×××と言う長沙の役者の出迎いか何かだろうと言ったもんだから。」僕は生憎その名前だけはノオトにとる訳に行かなかった。(一四八〜一四九頁)

「扇をかざして」、「×××と言う長沙の役者」を迎えに行った含芳は、何故そのことを「どうしても白状しない」のか。彼女は「長沙の役者」とどのような関係を持っているのか。これらの疑問はこの作品において最後まで明らかにされない。さらに興味深いことに、「僕」はわざと「×××と言う長沙の役者」という伏せ字を用いて、「生憎その名前だけはノオトにとる訳に行かなかった」と曖昧にしている。この点について、溝部優実子は近代中国史における「役者」の政治的意味を分析して次のように指摘している。

長沙が五四運動の極めて激しかったところであり、一九二〇年代以降共産党の拠点として、機能していく土地でもあった状況を鑑みると、「×××と言う長沙の役者」が、社会主義に関わったものであった可能性は高いと言えるだろう。

(中略)「役者」は、娯楽性よりも、この時代はるかに政治性を帯びた任を負っていたといえるだろう。

(中略) 含芳はただ、「子供らしい」弱々しい像をすり抜けて、ある種の政治性を帯びた存在として立ち上がった。くるだろう。⁷⁾

溝部優実子の論文は、この「長沙の役者」が社会主義に関わった革命家であり、含芳も「政治性を帯びた存在」であると解釈したものである。これは「湖南の扇」を革命運動とのかかわりから読む上で重要な指摘である。しかし、溝部優実子の論文には含芳が「ある種の政治性を帯びた存在」であることを証明する実証的な資料が提示されていないと言わざるを得ない。

『中国近代妓女史』によると、辛亥革命以降、封建家長制の重圧を受け、下層社会に生きていた多くの妓女は、民族と国家の存亡に瀕したとき、積極的に革命党に協力し、革命活動に身を投じて力を尽くしたようである。例えば、以下の事例が示すように、当時中国妓女は愛国行為に関わるることによって、革命性・政治性を体現していたとされる。

「辛亥革命において」上海独立の後、張俠琴、唐天琴などの遊郭の妓女たちは激動的な革命運動の中、中華女子探偵団養成所を創立し、革命軍のため情報を収集したり、スパイを養成しようとした。 (中略) 計画としては、まず養成所で探偵の知識を三ヶ月勉強し、探偵の人材となつてから、最前線へ駆けつけ、行軍する時の敵情及び国際上の秘密を偵察する。⁸⁾ (拙訳、以下の中国側の資料も特に明記しない限りすべて同様。[]内は訳者補注)

また、『読売新聞』に連載された清水安三の「北京より」においては、一九二三年四月一六日から一八日にかけて、「革命婦人」という副題で、中国女性の革命活動が紹介された。一七日の「革命婦人(二)」では、次のように書かれている。

第二次革命⁹⁾の前後再び婦女運動家蹶起して、民軍聲援の爲めに奮闘した。(中略) 唐群英の妹慕英なるものもまた女俠團を組織して、長江方面に出没し民軍の爲に一臂の勞をした筈である。要するに第二革命に於ける婦人の活動は、刺客として東奔西走せしに止まり、革命成るに及んでは何れも杳として其の消息を洩らさぬ。

「読売新聞」の記事を通して、中国女性が革命運動に果たした役割が十分に明らかにされるだろう。特に注目してきたいのは、当時の革命女性が活躍していた場所として「長江方面」が指摘されている点である。「湖南の扇」の「僕」が旅行したのは、革命家を輩出した長江都市の湖南長沙である。一九一九年の五四運動をきっかけとして、一連の反帝国主義・反封建主義の愛国運動が全国に拡大していった。長沙は五四運動の後、反日運動が高揚し、革命的な機能を果たした都市である。このように、中国女性も積極的に革命活動を行ったという同時代コンテクストとの相関から、含芳は単なる「長江の役者」のような革命家の協力者であるだけでなく、彼女自身も革命運動を展開する革命家である可能性も高いと推測できる。

さらに、この反日、反帝国主義を旗印とした五四運動の中心地が北京であることに注目しよう。北京は五四運動において政治・文化の発信地としての役割を果たしていた。二〇余の省、一〇〇余の都市で北京の学生に呼応して、日貨排斥は野火のように広がった。このようなコンテクストからみると、「北京生まれ」の含芳は革命運動の激しい北京から地方湖南に来て革命家に協力する女性革命家である可能性もある。とすれば、含芳がかざした「扇」は地方の革命家と会うときに使われた道具として重要であるともいえよう。

譚が妓女と斬罪のことを話している間、「僕」は含芳の顔を見ながら、「理智的には彼女の心もちを可也はつきりと了解した」。一方、含芳は「耳環を震わせながら、テエブルのかけになった膝の上に手巾を結んだり解いたり」することで、自分の内面の感情を隠しているように見える。さらに、玉蘭と斬罪された黄六一についての話題が含芳に与えた衝撃が「僕」に伝わってきたということは明らかである。

僕は体の震へるのを感じた。それは僕の膝を抑へた含芳の手の震へるのだった。(一五三頁)

ここでは、「僕」の体の震えは含芳に対する「理智的」で「かなりはつきり」とした「了解」ではなく、含芳の隠された内心の動きの表現にすぎない。それは単に恐しい場面を目撃した「震え」ではない。今まで論じてきたように、含芳は湖南長沙で革命家に協力した革命家である可能性が高い。だとすれば、同じ革命家であった黄六一が斬罪されたこ

とが耳に入った際、彼女は「手巾を結んだり解いたりしてゐた」ことよつて、懸命に悲痛と憤慨の気持を抑えざるをえなかったのではないか。革命家である故に、彼女は玉蘭と同じで大勢の前で黄六一への敬愛を表明することもできず、「日かげの土に育つた小さい球根」のように「人目に触れないやうに」革命の力を蓄積するしかできない。したがつて、玉蘭の大胆な行爲を目撃した含芳の「手の震え」は實際彼女の内心の震えとも考えられる。

妓館で遭遇した「小事件」の翌日、「僕」は帰途に着き、以下のように記述している。

僕は三泊の予定通り、五月十九日の午後五時頃、前と同じ沅江丸の甲板の欄干によりかかつていた。白壁や瓦屋根を積み上げた長沙は何か僕には無気味だった。それは次第に迫つて来る暮色の影響に違ひなかつた。僕は葉巻を銜えたまま、何度もあの愛嬌の好い譚永年の顔を思い出した。が、譚は何の為か、僕の見送りに立たなかつた。

沅江丸の長沙を発したのは確か七時か七時半だった。僕は食事をすませた後、薄暗い船室の電灯の下に僕の滞在費を計算し出した。僕の目の前には扇が一本、二尺に足りない机の外へ桃色の流蘇を垂らしていた。この扇は僕のことへ来る前に誰かの置き忘れて行つたものだった。僕は鉛筆を動かしながら、時々又譚の顔を思い出した。彼の玉蘭を苦しめた理由ははっきりとは僕にもわからなかつた。しかし僕の滞在費は——僕は未だに覚えている、日本の金に換算すると、丁度十二円五十銭だった。(一五三—一五四頁)

旅費ばかりを考えている「僕」は誰かの置き忘れた扇を凝視し、玉蘭と譚との葛藤を思い出す。片岡鉄平はこの部分について、「作者には、人生に対する何の興味も、情熱もロマンチズムも失はれて居る。その悔恨が枯淡な手法によつて暗示されてゐるのである」⁽¹⁰⁾と評している。塚谷周次⁽¹¹⁾と神田由美子⁽¹²⁾の分析では、「湖南の扇」における「扇」に異国趣味の小道具という解釈を付与することによつて、「扇」の背後に隠されている意味性やドラマに対する「僕」の無関心が強調されている。

しかし、「湖南の扇」の草稿を調べてみると、最後の部分は次のように書かれている。

僕は三泊の豫定通り、五月十九日の午後七時頃、前と同じ沅江丸に乗つたが、あの愛想の好い譚は用事か何かの為

に、僕の見送りには来なかつたらしい。僕は船の動き出した後、羽虫の群った薄暗い船室の電燈の下の机に向かひ、時時彼の事を思いながら、僕の滞在費を計算し出した。玉蘭の譚に憎まれた訳は未だに僕自身にもはつきりしない。が、僕の滞在費は日本の金に換算すると、丁度十二円五十銭だつた。⁽¹³⁾

今までの先行研究は草稿に関して、殆ど注意を払っていない。草稿と完成稿とを照合してみてわかるように、草稿より完成稿のほうは明らかに叙述が詳しくなっている。特に扇については、草稿では全く触れられていないが、完成稿では「桃色の流蘇を垂らしていた」扇が書き加えられている。言うまでもなく、「扇」の書き入れが芥川の意図的な行為であることは明らかである。とすれば、「扇」の持つ象徴的意味が浮かび上がってくるだろう。この草稿と完成稿の比較については、海老井英次の「中国人の命をも賭するような情熱的なロマンを行き抜くことの出来ない現実を、図らずも表現していた」という解説が示唆に富んでいる。さらにこの解説を踏まえていうと、「情熱に富んだ湖南の民の面目を示す」ことを目的とした「湖南の扇」において、「扇」はすでに革命的「情熱」と繋がって隠喩的な意味を持っている。つまり、前述したように、この「扇」はロマンチックな異国情趣を強調するための小道具であるだけではなく、革命的情熱を持つ中国女性のメタファーとして機能していると言つてよい。結末で、船室の扇の持ち主については言及されていないにもかかわらず、「僕」の扇を凝視したまなざしの背後にあるのは、湖南で遭遇した「小事件」に対して芥川の「無関心」ではなく、逆にそのような社会変革の激しい時代に置かれた中国女性から受けとつた衝撃であると見えよう。

第三節 排日運動における女学生と妓女

「僕」は長沙に着いた翌日、譚の案内で湖南名勝の観光に出かけた。その日、譚はすれ違ったモオタア・ボオトに乗つた「支那美人」たちの姿を見ると、「始ど仇にでも遇つたやうに」一人の女性を指し示した。その女が斬罪になつた土匪頭目の黄六一の情婦であり、「黄の生きてゐた時には中々幅を利かしてゐた」と語る。譚は「僕」の「退屈」を気にせず、突然「湘南工業学校」の参観を提案した。その時、「僕」は「ついきのふの朝、或女学校を参観に出かけ、存

外烈しい排日的空気に不快を感じてゐた」。このように、「湖南の扇」においては、玉蘭という中国女性の登場は「僕」の感じた「或女学校」の「排日的空気」と繋がっている。

これまでの先行研究は黄六一とのかかわりから玉蘭を分析してきた。青柳達雄は、同時代中国社会の「土匪」について分析したうえで、黄六一を「官僚や地方の地主などに対して強い反感」を持ち、「革命以降の混乱に乗じて全国各地に簇生していた」革命党として、さらにその情婦の玉蘭を中国の有名な女性革命家秋瑾をモデルとした「革命的精神の持主であった」と見なしている。⁽¹⁵⁾ 芥川が玉蘭という女主人公に女性革命家の秋瑾を投影させたかどうかについてはまだ検討の余地があるが、玉蘭の「革命的精神」を見出した青柳の論点には首肯できる。本論文は、「湖南の扇」で書かれた女学生の排日運動と結びつけ、同時代の中国妓女の排日運動というコンテクストから、玉蘭という女主人公の革命性を明らかにしたい。

「湖南の扇」で書かれた「或女学校」は、芥川の「雑信一束」（『支那遊記』収録、一九二五年）の「七 学校」の章にも見られる。

長沙の天心第一女子師範学校並に附属高等小学校を參觀。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰ふ。女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使はないから、机の上に筆硯を具へ、幾何や代数をやつてゐる始末だ。⁽¹⁶⁾

湖南の女学生運動は五四運動で活発に展開された例として史料でよく取り上げられている。⁽¹⁷⁾ 芥川は「雑信一束」で五四運動以降活発化した湖南の女学生の排日運動の雰囲気伝えていく。芥川の眼に入った排日運動の様子は、湖南の女学校だけでなく、「排日の歌」を口にしながら西湖の湖畔を歩く「支那の中学生」たち、天平山で見かけた「排日の落書き」なども『支那遊記』によって点描されている。

さらに、ここで問題になるのは、「湖南の扇」で芥川が「或女学校」の「存外烈しい排日的空気」に感じた「不快」である。その「不快」を単に字面通りに読んで終わらせては、この小説の持つ可能性は捉えきれないのではないだろうか。

芥川の長沙師範学校を參觀した体験について、友人の江川渙は次のように回想している。

女学生たちは日本が帝国主義的侵略をやめるまでは断じてこの運動はやめないと決意を固めている。その決意と闘志のほげしさを実際に見たとき、芥川はもう少しで涙が出そうになるほどの感動に打たれた、と語っていた。「中国人という民族は全くたいした民族だね。いまに見たまえ。いまに、君。中国はたいした国になるよ。」

この話のあとで芥川は感慨ぶかい表情とともにこうつけ加えた。¹⁸⁾

江川渙の回想から、芥川が女学生たちの抗日精神の激しさに対して、決して「湖南の扇」で書いたような「不快」感ではなく、その代わりに深い感慨を抱いていたことがわかる。

周知のように、日本帝国主義の侵略に反対して爆発した五四運動においては、女学生たちは「売国賊の懲罰」、「条約調印の拒否」を要求する街頭デモ、日本商品のボイコット、救国募金などの愛国運動を展開していった。その一方、すでに述べたように、民族危機の意識に根ざした反日運動に、女学生だけでなく、下層社会に生きていた妓女たちも参加した。中国近代史において、妓女たちが積極的に五四運動の学生を応援し、自ら「日貨排斥」を提唱した愛国的事例が少なくない。その一例として以下のような記述がある。

一九一九年五四運動が北京で勃発した。(中略)六月六日西福致里の妓女である妙蓮は国民大会に五〇元寄付した後、また各妓楼に「謹んで花柳界の同胞に告げる書」を配った。原文は以下の通りである。

我々中国は滅亡に瀕している。今まだ滅亡していかないのは、すべて少数の国民の気概のおかげである。外交の失敗した消息が伝わってきて以来、まず愛国の学生たちが売国奴を処罰し、日本商品をボイコットする運動を行った。(中略)ここに全国の花柳界の同胞に各自の良心に従って、国民としての本分を尽くすように、ご勧告致したい。八条の方法を付記する。(中略)一、日本商品をお買いにならないように、花柳界の同胞にお願い致したい。一、日本紙幣をお受け取りにならないように、花柳界の同胞にお願い致したい。¹⁹⁾

言うまでもなく、女学生と妓女は半封建・半植民地の中国社会構造において雲泥の差というほど異なる階級に属して

いる。それにもかかわらず、知識人階級の女学生にしても、社会的身分の低い妓女にしても、彼女たちは排日運動の際に反日本帝国を目標とし、「日貨排斥」によって日本帝国と闘争する。女学生と妓女とは自国に対する愛国意識と帝国に対する対抗意識という点で共通しているといえよう。

芥川は五四運動後、排日運動の最も高揚した湖南長沙を訪れた。彼は訪中体験の紀行文『支那遊記』や友人宛の書簡でも繰り返し当時の排日運動を生々しく報告している。その「存外烈しい排日の空気に不快を感じてみた」という表現の裏に、西洋列強に蚕食された中国社会における中日関係への芥川の鋭敏な認識が反映されているといえよう。「僕」が初めて玉蘭という女性を観察した後、わざわざ「或女学校」で「存外烈しい排日的空気」の不快な体験を関心のないかのように書きこんだのは、玉蘭と当時の排日運動の女学生との間に共通した抵抗意識を芥川が捉えているからである。

「僕」は湘江で玉蘭を望見したその日の夜、譚と一緒に妓館に上った。その妓館は「上海や漢口の妓館にあるのと殆ど変りは見えなかった」と描かれている。ここでは、何故わざわざ上海や漢口の妓館に触れたのかについて考えてみよう。芥川は中国滞在中、何回か妓館に上がり、妓女と同席した経験を持っていた。特に帰国後発表された『上海遊記』（『大阪毎日新聞』、一九二一年八月九月）で妓館での体験が記されている。ここで注目しておきたいのは、妓館や美人などの印象より、以下のような記述である。

確かに雅叙園の局票には、隅に母忘国恥、排日の気焔を挙げてゐたが、此処のには幸ひそんな句は見えない。⁽²⁰⁾

「雅叙園」については、『芥川龍之介全集』の注解では説明がなされていない。芥川が上海で旅行した当時彼を案内した島津四十起によって書かれた『上海案内』によると、「雅叙園」は上海湖北路にあり、「料理は次の二だが家が大きく看板が古いので知られて居る」⁽²¹⁾。中国料理屋である。「局票」で書かれた「母忘国恥（国恥を忘れるな）」の「国恥」とは、一九一五年五月九日袁世凱の北洋軍閥政府が日本の出した中国侵略を目的とした「二十一箇条」を承認したことである。一九一九年の五月九日の「国恥記念日」に、北京の学生たちによって始められた排日運動は全国に波及し、日貨排斥運動が開始された。「上海遊記」のこの箇所を通して、当時の排日運動が中国社会の津々浦々に広がっていたこ

とをうかがうことができる。

「雅叙園」は芥川にとって、「ショックを受けるやうな所」²²である。その「ショック」とは、「上海游記」で書かれたやうな便所を料理場の流しにしたことに対するものではなく、この「母忘国恥」と書かれた「局票」と高揚した排日運動が芥川に与えた深い印象のことである。「湖南の扇」でさりげなく上海の妓館を取り上げたのは、中国体験を強調するというより、むしろ湖南の妓館にも上海の「雅叙園」で遭遇した排日的な空気と同様の空気が漂っていることを暗示しているのではなからうか。

「僕」と譚が人血のビスケットについて話している時に、玉蘭はやってきた。譚は「愛想の好い顔をしたまま」、彼女に「褐色の一片を突きつけて」いた。人血ビスケットを妓女に強いる仕打ちをした譚の行為には、男が女を支配するという家長社会における男性の権力意志が投影されている。譚の挑発的な行為に対して、玉蘭は無言でビスケットを噛み始めたのではなく、「譚の顔を見つめ、二こと三こと問答をし」てから、大勢の見守る前で、「ビスケットを受け取つた後」、「何かしゃべり出した」ように言葉を発してビスケットを噛む。彼女の発した言葉は、譚の通訳を通して、「僕」に次のように伝わる。

「好いか？ 逐語訳だよ。わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味わいます。……」
 僕は体の震えるのを感じた。それは僕の膝を抑えた含芳の手の震えるのだった。

「あなたがたもどうかわたしのように、……あなたがたの愛する人を、……」

玉蘭は譚の言葉の中にいつかもう美しい齒にビスケットの一片を噛みはじめていた。……（一五三頁）

湘江での譚の紹介によれば、黄六一は「平生密輸入者たちに黄老爺と呼ばれてゐた」。前述した溝部優美子の論文では、黄六一が処刑されたのは五月九日という排日を想起させる日であり、「黄六一の反体制的な色彩を強く裏付けるものとなっているといえよう」²³と指摘されている。ここにおいて、玉蘭が大勢の人の前で、愛人の人血ビスケットを噛み始め、敬愛の意を表明したことを通して、彼女が持つ黄六一と同じような反体制の意志を伺えよう。

さらに、玉蘭がこの情熱的行為によって「見られる（見せられる）」女から発話する「見せる」女へ反転したという

ことにもなる。譚と玉蘭の対立には、単なる男／女という二項対立のみならず、支配階級／下層被支配階級の対立も含まれている。さらに、玉蘭が日本人旅行家と中国の男性の前で、恋人の人血ピケットを食べるといふ衝撃的な行為は、異民族（帝国支配者）、性差別（父権体制）、階級（妓女の身分）という三つの権威に抵抗しようという彼女の意識も読みとれる。したがって、ここでは通俗的な「男Ⅱ上位、女Ⅱ下位」という図式と違って、下層社会の被支配階級としての女の主体性と抵抗意識も読みとれよう。

「僕」は妓館で玉蘭の衝撃的なシーンを目撃した翌日、「前と同じ沅江丸」で長沙を去る。船室で「僕」は「鉛筆を動かしながら」譚と玉蘭の葛藤を思い出す。第二節で言及した「湖南の扇」の草稿をもう一度見てみよう。

僕は船の動き出した後、羽虫の群った薄暗い船室の電燈の下の机に向かひ、時時彼の事を思いながら、僕の滞在費を計算し出した。玉蘭の譚に憎まれた訳は未だに僕自身にもはつきりしない。が、僕の滞在費は日本の金に換算すると、丁度十二円五十銭だった。¹²⁴

「扇」と同じように、草稿には「鉛筆」も全く書かれていない。完成稿の末尾では、日本人旅行家の「僕」の動かした「鉛筆」と玉蘭とは一見無関係のように書かれている。ここで「鉛筆」は玉蘭と何か関連性を持っているのだろうか。またその背後には何か隠されているのだろうか。

前述したように、玉蘭という女主人公の登場はすでに排日運動の女学生と繋がっている。一方、完成稿の「鉛筆」は「雑信一束」における「女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使はない」という部分を容易に想起させるだろう。このように、草稿との比較を通して、芥川は排日運動の女学生のボイコットした「鉛筆」を書き入れることによって、再び玉蘭という虚構の人物と排日運動の女学生との共通した抵抗精神を暗示していると言っても過言ではないだろう。

さらに、玉蘭の行為を当時湖南長沙で活発化した排日運動というコンテクストと合わせて見れば、革命の雰囲気において彼女がいかに自己の主体を自覚的に形成し、民族的・階級的・家長制的支配に意識的に向き合ったかがわかる。このように、五四運動の後に排日運動の高まった湖南の長沙で遭遇した「小事件」は、単なるエキゾチックなものではなく、半植民地された中国下層社会に広がった抵抗意識にもつながっているといえよう。

第四節 どこまで革命を書きうるか

中国旅行中、芥川は友人への書簡を通して中国で遭遇したことを紹介する。一九二一年五月三十一日付、滝井孝作宛の絵葉書の中で、芥川は長沙について次のように友人に述べている。

長沙は湘江に望んだのだが、その所謂清湘なるものも一面の濁り水だ 暑さも八十度を越へてゐる バンドの柳の外には町中殆樹木を見ぬ 此処の名物は新思想とチブスだ

芥川が友人にわざわざ言及した長沙「名物」の「新思想」とは、当時彼自身が感じ取った中国全国に拡大していた半封建・半植民地社会に抵抗する革命思想である。

また、長沙を訪問する前の五月二日、芥川は西湖の見物に出かけた途中、中国名妓蘇小小、そして中国近代最初の女性革命家であり、女性解放運動の先駆者である秋瑾の墓、有名な岳飛の廟などを見物した。彼は風景や名所旧跡より、人間と生活に目を向けた。この日の佐々木茂索宛の書簡において、「この頃の僕には蘇小小より女史の方が興味がある」と芥川は「革命に殉じた」秋瑾への関心を示している。この点からみると、芥川が革命の余波ともとれる中国の「新思想」に対して無関心であったとは断言できない。

では、何故小説や紀行文で革命や革命家についてはっきりと書きとめなかつたのか。この問いに答えるには、当時の日本の社会状況を考慮しなければならない。

日本において、明治以来昭和の敗戦まで約八〇年間厳しい言論統制と検閲制度とが続いた。一八八九年二月発布の帝國憲法では、「言論の自由」については「法律ノ範囲内ニ於テ言論、著作、印行、集会、及結社ノ自由ヲ有ス」（第二九条）とされ、「新聞紙条例」、「出版条例」、「保安条例」、「集会条例」の四つの言論統制法の範囲内という制限つきでしか認められなかつた。

また、戦前日本の検閲に関する準拠法規として、一般図書出版物を扱う出版法（明治二六年法律第一五号）、新聞に

関する新聞紙法（明治四二年法律第四一号）が挙げられる。一般出版物は出版法の規定によって、出版の三日前までに当局に製本二部を納本し検閲を受けることが義務として課せられていた。一方、四五条からなる新聞紙法の第二三条には、「内務大臣ハ新聞掲載事項ニシテ安寧秩序ヲ紊シ又風俗ヲ害スルモノト認ムルトキハ其ノ発売及頒布ヲ禁止シ必要ノ場合ニ於テハ之ヲ差押フルコトヲ得」とある。新聞は発行と同時に内務省二部、管轄地方官庁、裁判所検事局へそれぞれ一部が送られて検閲を受けた。

新聞社や出版社の編集者から作者本人まで、こうした厳しい検閲制度による発売禁止、掲載禁止、差止を避けるため、あらかじめ納本の前に「革命」「共産主義」などの言葉は伏せ字（「○○」「××××」）または空白欄で表記し直す手段をとらざるをえなかった。このように、伏せ字は検閲が厳重に行われるようになるにつれて一氣に増大し、何行にも渡って伏せ字だらけの文章が氾濫するようになっていく。

芥川が活躍した大正時代は、大正デモクラシーの流れを受け、出版に対する規制が一時的に緩やかになったが、一九二五年に出された言論の統制などを定めた「治安維持法」の下で言論弾圧が激しく行われた。このような言論の自由のない時代において、芥川の小説も検閲によって訂正・加筆・削除を余儀なくせざるをえなかった箇所も多数存在している。「湖南の扇」で「長沙の役者」の名前を「××××」の伏せ字にしたのは、検閲を免れるためにとった対策であると考えられる。また、中国旅行の帰国後伏せ字が用いられて出版された作品として、「湖南の扇」のほか、「將軍」（「改造」一九二三年）、「河童」（「改造」、一九二七年）などが挙げられる。「將軍」の中には一六箇所伏せ字がある。

芥川は北京で胡適と何回か会って検閲問題について話し合った。胡適は一九二一年六月二七日の日記で以下のように書きとめている。

芥川はさらに、中国の作家が享受している自由は日本人の得ている自由よりかなり幅の広いように思われ、それらうらやましい、と語った。実は、中国の官吏たちは私たちに自由を与えようと考えているわけではない。一つには、私たちが何を言っているかわからないし、二つには私たちが干渉する気力も能力も欠けているだけのことである。芥川の話では、彼は古代の好色な天皇が女を背中に馬乗りにさせるといふ小説を書いたのに、その本が出版出来なかつたということである。²⁵⁾

芥川と同世代の文人として、胡適は哲学者でありながら、一九二〇年代以降自由主義を主張し、言論、出版、集会、結社などの基本的自由権の確立のための闘争を呼びかける。近代中国の歴史において、清の末期から中華民国にかけて、袁世凱から蒋介石まで、民衆の言論自由などに対する統制は厳しく、新聞雑誌の廃刊、新聞社の閉鎖、出版禁止、記者や文人への迫害、逮捕、虐殺などを強いた。このような言論統制と検閲制度は、日中両国の知識人が共に直面した現実の問題である。それにもかかわらず、芥川は中国文人の「自由」への羨望を隠しきれずに胡適に述べている。胡適の名前が「支那游記」所収の「江南游記」に二度出ているにもかかわらず、検閲に関する二人の談話に関しては、芥川が作品で何の記述も残っていない。しかし、六月二十七日の談話は芥川にとって決して何の影響もないものではない。この談話が芥川文学にもたらした影響については先行研究²⁶⁾ですでに詳しく論じられているが、さらに踏み込んでいうと、胡適との会見内容を公表しなかったのは、却って芥川がどれほど日本当局の検閲に強く注意を払って作品を創作していたかということの証拠である。それ故、芥川が中国の革命運動や革命思想を紀行文と小説で語らないのは当然であるといえる。

このように、「湖南の扇」で芥川が何故中国妓女を主人公としたのが解明できる。先述した通り、激動の革命運動と女学生の排日運動という当時の中国の社会状況を照合してみると、含芳と玉蘭を革命に関わる近代中国女性と見なすことは不自然ではない。「革命」、「革命家」などの言葉を作品に入れてはいけぬ社会状況のもとで、芥川は中国で出会った妓女のイメージを借りて、「湖南の扇」において当時の中国の高揚した革命運動を描き出しながらも、言論統制と検閲制度の網をくぐり抜けようとしたといえよう。「湖南の扇」の淡々とした描写を通して、逆説的に、当時の湖南の革命的雰囲気がかがいがい知ることができる。

第五節 おわりに

「湖南の扇」において「僕」は文化と言語の二重の壁のため、中国女性という「他者」の「内部」に入ることができず、始終外部からエキゾチックな中国女性を観察している。彼女たちを「外部」からしか語れないことは、確かに先行

研究で論じられているように、ロマンティズムと「異国情趣」が溢れる「湖南の扇」における謎めいた人物造型の原因となっている。

しかし、本論文が論じてきたように、当時の中国の社会状況と照らし合わせてみると、「情熱に富んだ」「支那美人」の玉蘭と含芳という二人の中国女性は、父権と階級社会という権威に抑圧されても、革命運動に秘密裡に参与していた。このように、単なる中国の土匪と妓女の悲恋物語のように見える「湖南の扇」においては、玉蘭と含芳といった中国女性像はもはや弱者の表象ではなく、当時の中国の政治・文化そのものの縮図として理解することができるといえよう。

大阪毎日新聞の特派員として、芥川は一九二〇年代の激動期の中国を視察した。当時の中国は五四運動を通して、明らかに大きな変化を見せており、民衆運動が歴史の動きを大きく促進する力として歴史の舞台に登場してきた。芥川は中国民衆の烈しい反帝国主義・反封建主義の革命的雰囲気を感じとった。「湖南の扇」は、芥川が中国の湖南で感じ取った帝国／半植民地、支配階級／被支配階級の権力関係を見事に浮き彫りにしてみせながら、巧妙な設定を通して読者に革命の「情熱に富んだ」中国民衆の面目を示した作品として新たに評価できよう。

注

(1) 本論文における「湖南の扇」の引用は、『芥川龍之介全集 第十三巻』（岩波書房、一九九七年）による。

(2) 「湖南の扇」と「葉」の比較をめぐる研究として、彭春陽「芥川龍之介と魯迅——『湖南の扇』と『葉』を中心として」（安川定明先生古稀記念論文集編集委員会編『近代日本文学の諸相』明治書院、一九九〇年）、施小煒「へ人血饅頭」とへ人血ビスケット——『湖南の扇』について」（『国文学研究』第一一七号、一九九五年一〇月、八四―九三頁）、単接朝「芥川龍之介『湖南の扇』の虚と実——魯迅「葉」も視野に入れて」（『日本研究』国際日本文化研究センター紀要』第二四号、二〇〇二年、一一―一二四頁）が挙げられる。

(3) 紅野敏郎「芥川龍之介——支那遊記と湖南の扇——」（『近代日本文学における中国像』有斐閣選書、一九七五年、九五頁）。

(4) 塚谷周次「『湖南の扇』論考——芥川竜之介晩年の位相」（『日本文学』第二二号、一九七二年一月、六〇―六一頁）。

- (5) 関口安義『特派員芥川龍之介——中国で何を視たのか』毎日新聞社、一九九七年、一九八〜一九九頁。
- (6) 溝部優実子『「湖南の扇」——含芳の「扇」を糸口として』『日本女子大学紀要』第四八号、一九九八年、二七頁。
- (7) 同上。
- (8) 邵雍『中国近代妓女史』上海人民出版社、二〇〇五年、一三七頁。
- (9) 一九一一年の辛亥革命後、臨時大統領に就任した袁世凱は孫文を代表とした国民党の存在が自分の権力を脅かすものと考え、国民党の代表者宗教仁を上海駅で暗殺し、国民党員を罷免した。追いつめられた国民党は七月に第二革命を起こしたが、袁世凱の軍に鎮圧され、孫文らの国民党員は海外に逃亡し、第二革命は失敗に終わった。一〇月には袁世凱は国民党解散を命じ、独裁体制を固めた。
- (10) 片岡鉄平「作家としての芥川氏」『芥川龍之介研究資料集 第四卷』日本図書センター、一九九三年、一三六頁。
- (11) 前掲(4)。
- (12) 神田由美子『「湖南の扇」——無気味な(異国)夢』『芥川龍之介と江戸・東京』双文社、二〇〇四年。
- (13) 『芥川龍之介資料集 図版1』山梨県立文学館、一九九三年、三一頁。
- (14) 海老井英次「湖南の扇 解説」『芥川龍之介資料集 解説』山梨県立文学館、一九九三年、二八頁。
- (15) 青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説(承前)」『関東学園大学紀要経済学部編』、一九八九年二月、七三〜七四頁。
- (16) 『雑信一束』『芥川龍之介全集 第十二巻』岩波書店、一九九六年、二二三頁。
- (17) 『五四時期湖南人民革命斗争史料選編』(湖南省哲学社会科学研究所現代史研究室編、湖南人民出版社、一九七九年)と、『中国女性の一〇〇年』(中国女性史研究会編、青木書店、二〇〇四年)を参照。
- (18) 江口渙「その頃の芥川龍之介」『わが文学半生記』日本図書センター、一九八九年、二一九頁。
- (19) 前掲(8)、一七三〜一七四頁。
- (20) 「上海遊記」『芥川龍之介全集 第八巻』岩波書店、一九九六年、四五頁。
- (21) 島津四十起『上海案内』風金社、一九二四年、三五九頁。
- (22) 前掲(19)、四四頁。
- (23) 前掲(5)、二七頁。

- (24) 前掲(13)。
- (25) 中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『胡適的日記 上冊』、中華書局、一九八五年、一〇九頁。
- (26) 単援朝『北京の芥川龍之介——胡適とのかかわりを中心に』、『芥川龍之介研究』中国文学との関わりを中心に』筑波大学博士(文学)学位論文、一九九一年。